

講義の風景

文学部

山田昌弘教授

Yamada Masahiro

「家族」

[月曜1限]

日曜日明けて、休みボケがまだ残る月曜の1限。午前9時20分、定刻に「じゃ、はじめましょう」の一声で、『家族』の講義がはじまった。遅刻者はちらほらいるものの、10分後には教室の8割は埋まった。見渡してみても私語をする学生はいない。真剣にノートを取り、山田先生の話を耳を傾ける。

調査に基づく経験談交え穏やかに

記者は『家族』の履修学生の一人。

講義中に集中力を切らせて、ぼーっとしてしまったり、睡魔に襲われたりしがちな記者だが、この『家族』の授業だけは別。先生自身の経験談をちよくちよく挟みながら授業がすすめられていくことが多いので、自然に講義に引き込まれていく。

《やまだ・まさひろ 1957年東京生まれ。86年東京大学大学院社

会学研究科博士課程終了。東京学芸大学社会学研究室助手、専任講師、助教授を経て2004年東京学芸大学教育学部教授。2008年度から中央大学文学部社会学専攻教授。専門は家族社会学・感情社会学》

少子化問題を具体的に説き起す

著書では「婚活時代」を論じる

た。それだけに講義の内容は新鮮だ。人口増を前提にした高速道路

山田先生は人口の推移から話を説き起していく。日本の総人口は2004年をピークに減少。人口が減少しているといわれてもなかなか実

感がわかないものだが、これはとても多きな問題なのだ。「日本は人口

増加を前提に様々な予測値をたてているからだ」という。ところが、「人口減少」となるとそれらの予測が全部狂ってしまうことになる。

具体例をあげて山田先生は説明する。例えば、高速道路。「人口増加を前提に建設し、採算がとれるようにしてあるので、人口減少となってしまうと高速道路利用人数が予想に到達できず、採算がとれないことになってしまう」。

これはほんの一例だが、人口の減

少はこういったことが様々な事業でおこってしまう。その影響は大きく、このままでは日本の経済・社会全体が収縮してしまうことになる。少子化はもちろん家族にも影響を与える。

「実は戦後1950〜1955年にも少子化問題は起こっていた」と山田先生。しかし「現在起こっている少子化とは性質が違っていた」という。

戦後の少子化と今日の違いは

戦後のその当時に起こった少子化の要因の一つには、家族の画一化があった。「江戸時代の東北農村の離婚率は約50%で、再婚も多かった」というのは驚きだ。「明治・大正時代は、一夫多妻的習慣が残る。シングルマザーが多かった」というのも知らなかった。ところが、戦後ほとんどの人が結婚し子供を2〜3人産み育てるといのように家族が画一化された。

二つめは、避妊・妊娠中絶の普及による希望子供数の減少だ。これが

1950～1955年に起こった急激な少子化である。

しかし、メリットもあった。それは経済的な都合の良さである。「多産多死型社会から少産少死型社会に移行する過程で、生産年齢人口が増え、豊富な労働力が供給された」の

だという。

では現在起きている少子化はどんな問題をかかえているのだろうか。

一つめは、家族の格差の拡大である。「『結婚をしていない』『結婚しても子を産まない』『結婚しても子ができない』というように家族は



具体的な数値を示しながら講義がすすむ

いろんなスタイルをもつようになった」と山田先生。

二つ目は、希望と現実のギャップの拡大だ。日本の未婚者の9割は結婚願望を持っている。しかし結婚できないという現実がある。

労働力不足で経済成長低下

三つ目は経済的ダメージ。「少子化により人口



山田昌弘教授

活条件を親に依存している未婚者」を「パラサイトシングル」と定義し社会問題化した。また、著書『希望格差社会』（筑摩書房／2004年）で「格差社会」という言葉を一般に浸透させた。

発売中の『婚活時代』（白河桃子共著 デイスカパー携書）では、「結婚」するためには「就活」ならぬ「婚活」が必須の時代が始まっていることを論じている》

構成が変化してしまうことで労働力不足が生じる」のだ。ここでも山田先生は具体例を示した。介護問題である。高齢者は増えるのに、高齢者を見る人はいない。さらには社会保障負担の増加が経済成長の低下をもたらす。

これが現在起きている少子化である。

《山田先生は、著書『パラサイトシングルの時代』（ちくま新書／1999年）で、「パラサイトシングル」という言葉を造語。「学

卒後もなお親と同居し、基礎的生

『家族』の講義は、「ペットは家族か」という問いかけから始まっている。そんな問いを出発点に、『家族』を軸にして少子化の問題に展開してくる。まさに社会的だ。

「家族を定義してください」と言われたら何と説明しますか？「家族」とはナニ。あまりにも身近なテーマだけに考えがまとまらない。『家族』の講義は大変奥が深いとあらためて思い直した。

（学生記者 宮下沙希Ⅱ文学部3年）